

釜山国際映画祭報告 アジアフィルムアカデミー(AFA)に メンターとして参加して

Report of Busan International Film Festival
As a Mentor in Asian film Academy (AFA)

映像メディア学科・教授
Department of Visual Media・Professor

渡部 眞 Makoto WATANABE

要約

映像教育。とりわけ映画制作を教育ツールとして考えるということに興味があったが、折よく釜山国際映画祭のアジアンフィルムアカデミーで18カ国の次世代映画作家たちを指導する機会を与えられた。これは技術指導偏重を抜けるためにも意義あることであった。ここに報告と課題をまとめる。

1 釜山映画祭とは

1.1 国際映画祭としての位置づけ

釜山国際映画祭(BIFF=Busan International Film Festival)はアジアにおける最大の映画祭として知られている。1996年以降毎年10月に釜山市で開催され、国や市の全面的な支持を受けながら毎年拡大している。この映画祭はアジアの作品が数多く集まることで注目され、質も高いので欧米からも毎年たくさんの映画人やバイヤーが集合する。

釜山市はソウルに次ぐ韓国第二の都市である。しかし他国からのアクセスはそれほど良いとは言えない。それにもかかわらず毎年規模が拡大していく理由は開催時期が他の映画祭と重ならない10月ということもあるが、そのプログラム内容の良さにある。集められる作品は西アジアから東アジアの全ての国をカバーしているが、そこにはエグゼクティブプログラマーのKim Ji-Seokのように世界中を精力的に飛び回って作家との交渉にあたるスタッフの献身的ともいべき貢献がある。

1.2 国際化による映画の活性

またそれを支えているのが韓国政府と釜山市の映画祭にかける情熱と予算の配分である。釜山市を映画の町にしようというアイデアは長期的な計画で実行されてきた。開催当初は既存の映画館を使ったりマルチプレックスの映画館のいくつかを映画祭のために借りて上映していた。予算は少なかったが期間中の街をバナー掲示などで活気づけ、世界中から映画人を集めて注目度を上げていった。それがついに16年目の現在、地下鉄駅の新設などで交通網を整備しつつ、釜山国際映画祭のための施設も「映画の殿堂」とよばれる巨大な映画館(Cinema Center)と周辺施設を中心に作って充実させた。それによって映画祭の認知度は高まり、制限が多かった韓国で内外に向けてその実行力の高さを示すことになった。

1.3 韓国映画の夜明け

検閲制度が厳しかった時代を経て1990年代前半に企業が出資した初めての映画が世に出され、1999年の「シュリ」(監督カン・ジェギュKang Je-kyu)や2002年の「猟奇的な女」(監督クァク・

ジェヨン Kwak Jae-yong)の成功をきっかけに次々に作品が作られていた。またスクリーンクォータ制度 [1] によって国内の映画産業を保護し、これによって次世代映画人を育成することができた。

文化施策を超えて産業の柱としての映画制作を重視していったことが、結果的にデジタル編集や合成処理、アニメーションなどの関連業種を育て、その延長として釜山国際映画祭の開催を置くことで韓国映画人の世界交流を活性化させ、自国映画の国際化も図ることが出来た。



釜山シネマセンター

2 映画祭の未来

2.1 国際映画祭の3つめの顔

映画祭には2つの顔がある。ひとつは優れた作品を顕彰するコンペティションという面。そして作品を売買するためのフィルムマーケットという側面である。釜山国際映画祭もこうした作品の名誉と商業的価値向上の双方を推し進めて実績をあげた。映画祭を一種の祝祭の場として機能させ、全体を活性化していくことによって興行と名声と利潤が得られるしくみだ。

ところが2003年に釜山国際映画祭に招かれた侯孝賢(ホウ・シャオシェン) [2] はこの映画祭をより強くするためには後進を育てる場にもしなくてはならないと予見した。これを映画の未来への提案として受け止めた釜山フィルムコミッションは2004年からアジア各国の若手作家たちを招き、その育成のためのプログラムを組むことにする。

2.2 AFAの設置と運営

それがAsian Film Academy (AFA) の出発点である。釜山市にあるドンセオ大学と釜山市フィルムコミッションが中心になって運営されていく。現在のフィルムコミッションの主幹Oh Seokgeunはこの10年近い歩みは困難であったが有意義であり、毎年の反省が次年度の改革につながり、確実にこの数年間は育った作家たちが釜山(国際映画祭)に帰ってきていると述べている。(談)

2.3 参加者の顔ぶれ

2005年から2012年までの結果を見ると、毎年24人の若い参加者たちがこのプログラムに参加しており、のべ185人の修了者がいることになる。また参加者がアジア全体に広まっており、集計すると27カ国になっている。[3] プログラムのコーディネーターであるHyung-uk Moonによると、基本的には偏りを避けるために、各国2人以上は取らないようにしているという事である。それゆえ主催国である韓国も2人までになっている。2004年から2012年までの参加者の国別人数は以下のようにになっている。

アフガニスタン(8) バーレーン(1) バングラディッシュ(3)
中国(13) 香港(3) インド(17) インドネシア(8) イラン(7)
イラク(2) 日本(11) カザクスタン(2) 韓国 (18) ラオス(1)
レバノン(4) マレーシア(9) モンゴル(4) ネパール(4)
ニュージーランド(1) パキスタン(4) フィリピン(17)
シンガポール(16) スリランカ(4) 台湾(5) タジキスタン(4)
タイ(8) アメリカ(2) ベトナム(8)

2.4 ミッション

ミッションと題されたAFAのWEB ページの冒頭は次のように記されている。

Asian Film Academy (AFA) is an educational program hosted by Dongseo University, Busan Film Commission and Busan International Film Festival to foster young Asian talents and establish Asian filmmaker's network. Over the past 7 years, 171 alumni from 25 countries have been standing out in filmmaking all over the Asia and prestigious film festivals in the world.

アジアフィルムアカデミーはドンセオ大学と釜山フィルムコミッションによって主催され、アジアの若い才能を育成し、そのネットワークを作ることを目的としている。アジアおよび世界の映画祭においても7年間で25カ国、171人の修了生を生んでいることは注目されている。[4]



3 スケジュールとプログラム

3.1 募集と選考

若い作家たちをアジアから呼び集めるということは難しい。各国の状態は違うし各自の求めているものも異なる。そこでAFAでは彼らに課題を与え、それをもとに選別し組み合わせていく。企画提出とシナリオである。それらは電子メールでリクエストされ回収される。それを審査にかけて24人に絞り込んでいくと同時に企画内容も検討していく。2012年の選別は以下のスケジュールで行われた。

《AFA 2012 Schedule》

1. 申込み〆切 (4/30)
2. 選別発表 (6/10)
3. オンライン・プリ・プロダクション (8/1〜9/25)
4. AFA開催 (9/27〜10/14)

ここでオンライン・プリ・プロダクションとあるのは、制作のための準備をインターネットを通じて行うことで、メールやチャットなどを通して選ばれた若者の希望職種や方向性を見定め、シナリオを固めていき、同時に彼ら同士で話し合いをさせて映画の骨格を作っていくという作業である。これはこの数年に定着したシステムであるが、多国間のため同一の場所に集合して打ち合わせをすることが難しいAFAにおいて、釜山のオフィスを中心に作られるべき映画について各国の若者が検討を重ねて推敲していくのは意義のあることである。お互いの空間的な距離をインターネットで縮め、しかも時間をかけられるという利点もある。

3.2 脚本の完成

脚本は何度も推敲を重ね、選ばれた脚本家と韓国のプロ脚本家を中心にまとめられていき、次の二本が選ばれた。

- 1) 「ソク・ジンは泳げない」(Seok -Jin Can't Swim)

Written by Mohamed BuAli and Eiji Shimada

- 2) 「ホリデー」(The Holiday)

Written by Xaisongkham Induangchanthy

脚本は英語で書かれることが基本であり、フォーマットは世界共通のものである。選ばれた後は韓国語の対訳にして綴じられる。脚本検討はこの後全員が釜山に集合した後も重ねられ、撮影場所(ロケーション)とのすり合わせもあるため直前まで詰められていくことになる。

3.3 メンターの指導スタンス

映画制作には指導者が必要である。AFAでは直接技術指導するスーパーバイザーを各領域で数人配置している。またTA (Teaching Assistant)にも修了生などがあっている。しかしAFAに集まってくる若手参加者はすでに経験もあり、基礎知識もあるため、技術や手順を教えるだけではなく、間合いやタイミングなど、感性の具現化といった技を身をもって伝える人間が必要である。それは教えるということではなく「助言」という形が適している。これが「メンター (Mentor)」と呼ばれる映画人の招聘につながる。

AFAではメンターを毎年海外から招聘している。今年是中国からジャ・ジャンクー監督^[5]、イランからバルヴィス・パジャブ監督^[6]、そして撮影監督として日本から私が選ばれた。^[7]

事前に参加者全員の脚本を渡され、釜山に着いてすぐにシナリオを検討するところから始まった。3人ともお互い初対面であり、映画のスタイルも異なる。しかし映画のスタッフの役割はどの国であっても同じものであり、メンターの助言は技術分業の追求ということよりもそれぞれの作品に対応したコラボレーションの有り様である。



ジャ・ジャンクー監督



バルヴィス・パジャブ監督

3.4 制作プロセス

10分程度の作品を2週間ですべてを仕上げる。それまでに脚本の骨組みとロケハンなどはだいたい形づけられているとはいえ、撮影3日間でこのスケジュールをこなすのはかなり厳しいといっている。日々の割り振りは以下のようだ。

- 1日目 オープニング
- 2日目 参加者作品上映(10分づつ)
- 3日目～4日目 ロケハン
- 5日目 撮影監督ワークショップ
- 6日目 メンター作品上映・ディスカッション
- 7日目 撮影準備
- 8日目 リハーサル
- 9日目～11日目 撮影
- 12日目 ラフ編集上映
- 13日目 メンター指導(演出、撮影、編集)
- 14日目 色調整、整音
- 15日目 上映、修了

3.4.1 参加者作品上映

これは参加者同士がお互いを知ることと、各国の映画スタイルを見せるということで有意義であった。各自の作品を10分間(編集も可)上映し、そののちに質疑をしてもらう。断片だが映像は切り取られた瞬間から作家の背景を語りだすものだということがわかる。ネパールの作家は幼い二人の恋の物語を豊かな自然の中で堂々と唄い、イラクからの作家は政治的な批判を婉曲に寓話のなかに包んで仕立てあげていたり、またコメディありドラマチックなものありでバラエティーに富んでいて室が高かった。コメントを求められて「君たちはすでにして天才である」と賛辞を贈ったのも心からのものである。



3.4.2 撮影監督ワークショップ

ここでは実際のカメラを中心に撮影指導が行われる。必要な技術的知識を得る時間である。使用カメラはSONY PMW-F3でありXDCAMで収録される。[8] カメラ・レンズの光学的な基礎からH-def収録の基礎。そして波形モニターの見方や編集のワークフローを技術講師であるSunR.Kimが説明する。参加者も体験があるとはいえ、使用機材が国によって異なるため技術指導は必要になる。ただここで完璧に覚える時間もなく、TAが隙間をフォローしていく。



3.4.3 メンター 作品上映・質疑応答(マスタークラス)

メンターの作品上映は意義がある。直接携わったものからその極意を具体的に聞ける貴重な場である。私は「接吻」(監督・万田邦敏)[9]を上映し、具体的に照明をどう配置したか、またそのねらいは演出とどうからんでいったかなどを語った。撮影手順と役者の心理的な高揚をどうやって合わせていくかなど、制作に携わったものにしか教えられないノウハウを語った。質問も多く途切れることはなかった。

パルヴィス・シャバッチは「Deep Breath」を上映し、演出家として脚本をどのように組み立てるかについて話した。また古典的な作劇術を超えていくには脚本をどうしたら良いかなどについても語った。



3.4.4 撮影

プロダクションスタッフは大変有能で、トップの制作スタッフは韓国の大作を手がけた人たちが当たっているの、出演交渉、ロケハン、トランスポートーション(移動手段)などに関してはスムーズであった。問題は集まった参加者たちの経験不足で、演出がもたついたり決断がぼやけて俳優に伝わらなかったりが多かった。撮影となるとこうした寄せ集めの集団の欠点が出てしまう。しかし大方は正しい方向に修正されるし、俳優たちのプロフェッショナル意識が高く、演出の困難さは相殺される。



3.4.5 編集

表には見えないが編集は撮影演出と仕上げを結びつけ、映画の完成形の基礎を作る作業である。二人の編集担当者がそれぞれの作品に選ばれ、編集のメンターや音楽担当者と打ち合わせして作業に当たる。撮影が終わってからは我々招聘されたメンターも参加して、意見を述べていたので、編集室は常に満員の状況であった。



3.4.6 指導

撮影を終えたところで担当者を数人ずつ招いて、2時間ほどのディスカッションをおこなう。ここで現場での態度や反省などを含めて、より具体的にしかも密に語ることができた。



光がどこからやってくるかということを想像力を駆使して作りこんでいくことの意義や現場での決定の良し悪しなども詰めていった。

監督は演出にこだわり、撮影者は撮影にこだわる。ここでのせめぎあいはいくつの領域の拡大になりがちだが、実は作品レベルでの覚めた判断をどの領域もしなくてはならない。我々指導者の役割はそれを教えていくことにある。

3.4.7 上映

上映は釜山国際映画祭の最終日にシネマセンターで上映された。参加スタッフ、出演者、AFAの指導者らが来場して作品を鑑賞する。その後参加者たちに修了証がメンターたちから手渡され、さらに奨学金が対象者に授与された。

映画祭の最終日がAFAの修了にもなり、その後参加者は釜山国際映画祭のクロージング・セレモニーに参加して全てのプログラムも終了した。

4 映画の未来は文化の未来

4.1 メディアとしての映画

映画がすでに古いメディアであり、その形が消滅していくことは時間の問題だと言われる。映画は20世紀の芸術であったが、その後半にはテレビに地位を奪われ、21世紀にはWEBに奪われるであろう、と。だが映画がメディアとしての役割をしたのはきわめて短い。むしろいま映画は創作物として自由である。

正確に言うと演劇空間を借用して上映していた当初、映画は強力かつ有効なメディアとして機能していた。政治的なプロパガンダや戦争報道が映像として流れ、映画館という場で共有した。しかしテレビジョンの出現で速報性や同時性が取って代わられ、映

画館は光と音を遮断した装置とした機能のみをきわだたせる。ところが皮肉なことだが現在テレビやWEBに課せられている公共性の制約から少しづつ自由になっていき、それゆえに表現の多様性も獲得していく。いまや映画は創作物として独立しているので、それが映画館という場を離れてテレビジョンやWEBに登場してもいささかも戸惑わない。メディアというしぼりがなくなっているのだ。もちろん場を選びたいと思う作家の立場からのこだわりはあるだろうが。

4.2 まとめ

つまり今問われているのはハコの優劣ではなく表現の多様性を獲得できるかという事である。それを個人としても国としてもしっかりと方向性を見据えていかなくてはならない。

AFAは釜山国際映画祭のなかでは目立たない催しとして存在している。無名の新人たちの研修の場であれば当然であろう。

しかしすでにこの中から何人もの作家が次世代として育っており、再び釜山に回帰していることを知る時、10年に満たない道程であってもこの教育制度の意義が大きいと感じるし、そこに着目した釜山市には敬意を払いたい。釜山国際映画祭はAFAを内包することで、そうした未来への道筋をつけたのではないだろうか。

今回メンターとして参加して映画教育プログラムや基本制度、バックアップ体制など様々なことが参考になった。活かしていきたい。



AFA修了式

注釈

[1] スクリーン・クォータ(Screen Quota)

国内映画保護政策。2006年7月まで韓国の映画館は自国映画を年間146日以上の上映が義務づけられていた。フランスは国内全スクリーン40%。

[2] 侯孝賢(ホウ・シャオシェン)

台湾の映画監督。国立芸術専科学院卒。台湾ニューシネマの代表でもある。「非情城市」でヴェネツィア国際映画祭グランプリ、「好男好女」で金馬奨最優秀監督賞。ほかに「恋恋風塵」、「冬冬の夏休み」など。

[3] 例外として2005年は20人(うちTA8人)、2006年が23人、2011年は22人(Asian Film Academy Archiveより)

[4] http://afa.biff.kr/Template/Builder/00000001/page.asp?page_num=1763
前述の国数および総数と異なるのはTeaching Assistant を入れているかどうかの違いである。

[5] ジャ・ジャンクー(賈樟柯)監督

山西大学で学ぶ。2000年に『プラットホーム』でヴェネツィア国際映画祭のNETPAC賞(最優秀アジア映画賞)、ナント三大陸映画祭のグランプリ、プエノスアイレス国際インディペンデント映画祭のグランプリを受賞。2001年に『In Pubric』でマルセイユ国際ドキュメンタリー映画祭のグランプリを受賞。2006年に『長江哀歌』で第63回ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞を受賞。

[6] パルヴィス・シャバッチ(parviz Shahbazi) 監督

テヘラン放送大学卒業、1990年 The Rope、1991年 Black Spring、1997年 Traveller from the South 東京国際映画祭東京ゴールド賞・都知事賞受賞、2003年 Deep Breath

[7] 日本から釜山AFAへ行ったメンター(指導者)たち

2006 高間賢治(撮影)、2007 栗田豊通(撮影)、2009 黒沢清(監督)、2010 荻上直子(監督)

[8] XDCAM

SONYが開発した放送用のファイル形式。フルハイビジョンとそうでないタイプがある。MPEG記録であり、圧縮されている。Blu-rayディスクに収録する。

[9] 万田邦敏

映画監督。「UNLOVED」(2002年・プロデューサー仙頭武則)でカンヌ国際映画祭エキュメニク新人賞とレイル・ドール賞受賞。他に「ありがとう」(2006年)現在、立教大学現代心理学部映像身体学科教授。